

# 大正末期に生まれ、昭和、平成と歌い継がれた名曲に秘密が！

## 『君恋し』

### 昭和歌謡 誕生物語

第十曲目 文・山川智

フランク永井のヒット曲は数多あれど、『君恋し』に惚れ込んだファンは数知れまい。

韻を踏んで軽快に流れる旋律。つい口ずさむテンポ。元は大正末期に生まれ、昭和初期にヒットした曲だった。

詞の意味にしる女が男に恋焦がれるもの。3番の歌詞にそんな女の恋心が滲み出ていた。復曲、フランク永井の歌にはその3番がすっぽり抜けていた。

去りゆくあの影 消えゆくあの影 誰がためささえん つかれし心よ 君恋し ともしびうすれて えんじの紅帯 ゆるむもさびしや

歌心は男の未練となった。…女の、誰か知るらん紅帯を…

ス イング・ジャズ風にアレンジされたスロー

テンポなメロディーにのって、フランク永井が歌う『君恋し』が第3回レコード大賞に輝いたのは昭和36年のことだ。

冒頭の「宵闇くせえまれば 悩みはく涯なし」というフレーズを始め、「苦しき幾夜を誰がため忍ばん」みだるる心に映るは誰が影」といった歌詞が、声高に「愛だの恋だの」と語らない分、主人公の恋のせつなさを奥ゆかしく描いている。

けれど、昭和30年代半ばの歌にしる、その言い回しに、つい時代を感じてしまう方も少なくないのではないか。それもそのはず。実はこの曲が生まれたのは大正末期。オリジナルを歌ったのはエノケ

ンと共に浅草オペラの舞台で活躍していた花形シンガー、二村定一だった。だが、理由はわからないが発売元の東京レコードから、この曲がリリースされた形跡はない。その後、高井ルビーという男性歌手がレコーディングし発売するも、直後に関東大震災が起りレコードはお蔵入りに。昭和に入り二村が再び吹き込み直したところ、独特な哀調が日本人の心情にフィットして、たちまち大ヒット。それが昭和4年のこと。

当時、発売元の日本ビクターはアメリカ資本で洋楽しか扱っていなかったが、この歌の成功で歌謡曲の制作に踏み切ったといわれる。

なお、作詞者の時雨音羽（本名は池野音吉）は、北海道利尻島の出身で、町役場に勤めたのち19歳で上京。日大法学部を卒業後、大蔵省主税局に勤めながら詞を発表し、『君恋し』のヒットを機に大蔵省を辞めて専業の作詞家に転身したという変わり種。作曲者の佐々紅華は自宅にあった足踏オルガンを弾いて曲を作った

というから、やはり時代を感じる。とはいえ、大正末期に作詞された男目線の歌のわりには、かなり女々しい気がするのだが？

調べてみると、この『君恋し』、もともとは女目線で作られた歌で、原曲は3番まであり、そこには「燕脂の紅帯緩むも哀しや」なんていうフレーズもあるようだ。なんでも、

戦前の流行歌で歌われる『君』とは、ほとんどの場合、女性が男性を尊称する言葉だという。恋人を表わす『君』の呼称の意味が歌謡曲の中で男女逆転したのは、昭和30年代に入ってからのことだそう。

だから、フランク永井にリバイバルで歌わせるため、あえて3番を外して、無理やり男目線の歌に趣を変えたらしい。なるほど、この歌にはそんな変遷があったのか。

『君恋し』は現在、黒人演歌歌手のジエロもカバーするなど、時代を超えて歌い継がれている。大正から昭和、そして昭和から平成へ。名曲はいつの時代でも人々の心をゆさぶる、そんな不変の魅力を秘めている。

Yamakawa Chi

1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起JYJに行く』（共にイーストプレス）、『ヒューマンドキュメント 幸せのきずな』（リーブル出版）など。また、出版プロデューズ作品として『生きる 義家弘介（スターツ出版）』『デキる社員』『狂食ギャル』（共にイーストプレス）など多数。

